

おおさか
KEY
わーど
第27回

現代が求める
癒しのとももしび

宗教都市・大阪はいまも生きている



写真左：四天王寺 孟蘭盆会万灯供養
写真上：大阪城城灯りの景
写真下：1000000人のキャンドルナイト



闇のなかに灯っているろうソクの焰をじっとみると、懐かしい気持ちや、ほっとするような不思議な安心感がわき起こってくる。はるか太古の昔、人類が火を自分のものとして、夜は家族で火を囲み、料理し、獣から身を護ったときの記憶だろうか。焰には、人の心に様々な思いを呼び覚まし、傷ついた心を癒す力がある。

毎年、大阪では夏の夜に無数のろうソクが灯される。四天王寺(大阪市天王寺区)で催される「孟蘭盆会」の「万灯供養法要」である。推古元(593)年、聖徳太子によって同寺が創建された物語は、『日本書紀』にも記されている。現在の中央伽藍は、大陸のスタイルを伝えて金堂、講堂、五重塔が一直線上に並ぶ四天王寺式の伽藍配置と、創建時の建築様式を考証して戦後に再建された。

金堂や五重塔を回廊が囲んだ伽藍一帯に、今年も8月9日から16日までの夕刻から、先祖供養のために先祖の霊名を記して火を灯したろうソクが奉納される。その数、約一万本とも言われ、多くの参拝者のなかを、僧侶たちが経典を唱え、蓮をかたどった散華を撒いて供養に境内を練り歩く。

ろうソクの焰で境内は熱いぐらいであり、伽藍の建物や、仏教をモチーフとした壁画(金堂は中村岳陵、講堂は郷倉千朝、五重塔は山下摩起ら日本画家の作)も、読経の声と線香の煙、焰と参拝者の熱気で神秘的にゆれて見える。

八月は、京都五山の大火の送り火や嵯峨野の化野念仏寺の千灯供養が有名だが、四天王寺の

「万灯供養法要」は、観光客ではなく、純粹に信仰心から多くの老若男女が参拝に訪れている。かつて私も母に連れられ、孟蘭盆やお彼岸には四天王寺に参拝した。鐘樓の引導鐘で経木を回向してもらい、金堂の地下より湧くという亀井堂の霊水で流し、「万灯供養法要」のろうソクも灯した。

五木寛之さんは『宗教都市・大阪 前衛都市・京都』という著作で、名刹古社寺が多い京都ではなく、大阪の方を宗教都市と見なしたが、四天王寺の「万灯供養法要」を体験すると、大阪という大都会にいまも生きる日常的な信仰心の強さを再確認させられる。

全国で震災の犠牲者を悼む鎮魂のキャンドルナイトが開催されているが、大阪には、他にもろうソクを街に並べて人の心を癒し、なごやかにするイベントがある。宗教とはやや異なるが、今年で12回目となる「大阪城城灯りの景」では、大阪城一帯に約2万個のろうソク行灯を並べ、梅田の茶屋町や西梅田付近では、夏至と冬至の日に、スローライフを見なおす思いもこめて「1000000人のキャンドルナイト」が開催され、アーティストによる美しい灯りも登場する。また、道頓堀では川沿いの遊歩道に、ろうソクではなくLED電球を仕込んだ提灯を並べた「道頓堀川万灯祭2012」も開かれている。

真夏の夜の街なかで、こうした行事が開催されるのは、閉塞した社会に日々の生活を送らざるを得ない現代人が、焰のもつ美しさに癒しの力、精神的な救済を求めていることの証しなのだろう。